

---

# The Last Wings ~最後の翼達~

w i s h

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Last Wings 最後の翼達

### 【ZPDF】

Z3568C

### 【作者名】

wish

### 【あらすじ】

西暦20XX年に勃発した極東戦争。そこで語られる一人の英雄譚。彼らはなぜ戦いどのように死んだのか・・・今語られる。

## 第一話～戦争～（前書き）

初めて現代戦物を書きました、誤字や脱字・違ひが有つたら  
どなづん指摘して下さる。

## 第一話～戦争～

戦争があつた。

いや…戦争など人間が生まれた頃から腐るほど起きている。

20世紀に入つても、そして21世紀に入つても各地で銃声は止まない。

1914年～1918年、第一次世界大戦。戦死者数約1000万。

1939年～1945年、第二次世界大戦。戦死者数約6200万  
(民間含)。

1950年～1953年、朝鮮戦争。戦死者約600万。

1960年～1975年、ベトナム戦争。戦死者約150万。

1990年～1991年、湾岸戦争。戦死者約10万人。

2001年～2001年、アフガン戦争。戦死者数公表されず。

2003年～継続中?、イラク戦争。戦死者公表されず。

2003～21(2007年現在)世紀中の戦死者数約7960万人。

これだけ大勢の血が流されたのに関わらず世界中のどこかで戦争が続いている。

そして20XX年、6月15日、日本時間未明。

台湾海峡にて米中両軍、交戦開始 - - - - -。

このニュースが世界中を震撼させるのに1時間もかからなかつた。

米アレイスター大統領はただちに中国側に対して台湾海峡より中国海空軍の撤退を勧告。

中劉英明国家主席は『台湾は我が国の領土、米軍こそ撤退を』と米国に通達。

事実上の停戦交渉拒否、この翌日の6月16日に両国共に宣戦を布告。

ここに後に『極東戦争』と呼ばれる21世紀最大の悲劇と呼ばれる戦争の緒戦である台湾戦争が勃発した。

米中共に新型戦闘機（米軍・F-35A、中国軍・J-10）を投入し、台湾海峡の制空権確保が戦争の勝利へとつながることになつた。

だが最新鋭戦闘機を投入しても戦況は一進一退であつた。

この状況を開拓する為に中国は朝鮮（前年に事実上統一）に参戦を。

米軍は英・仏・露・印・日（日本）に参戦をそれぞれ求めた。  
イギリスフランスロシア インド

今、世界中の国々の思惑（利害）が極東でぶつかり、再び激動の時

代を迎えたのであった  
・  
・  
・。

## 第一話～勃発～

この時は日本国内で護憲派と改憲派がまだ改正内容について討論を続けており参戦は出来なかつた（第一次改憲論争）。

だが、米軍側の支持の立場を表明しつつ、伝家の宝刀である人道的支援をするとはつきり表明した。

この優柔不断な決断は憲法改革後も変わらず国際的舞台の裏側で非難を浴びる結果となつてしまつた。

日本国内でも内閣支持率低下を招き、改正後の支持率80%代はみるみる低下し支持率20%代と悲惨な結果となつた。

時の総理大臣・川瀬総一郎は内閣を解散し、この波乱の時代を次に託すべく総選挙に望んだ。

この時議席の過半数以上を獲得し一大政党にのし上がつたのは憲法改正であり戦争参戦派の自心党であつた。

そして、この激動の時代の中で日本を牽引すべく総理大臣に就任したのは若干37歳の自心党党首である霧島礼一であつた。

霧島は自らの給与と退職金を80%カットしそのカット分を軍事費に回すなどのパフォーマンスを実行し国民の支持を集めた。

また政治面においても法人税を国庫では無く直接に軍事費に回すなどの努力をし国民への負担を少なくし厭戦ムードが広まらないよう努力した。

世界史では『最も優れた戦時指導者』と呼ばれるも、軍事史においては『流血で手が汚れた指導者』の烙印を押される結果となってしまったのである。

その最大の原因となつたのが台湾戦争終結後に防衛大臣が軍部に通達した『領海並びに領空空絶対防衛エリア（Territorial Sea space and absolute Airspace Defense Area）』である。

通称・T S A D Aと呼ばれるこの防衛域は日本の領海（空）内に置かれ、そのエリアを突破された際には日本の敗北が確定されると言う国防研究所で行われたシミュレーション結果を元に置かれたものであった。

簡単に言つなれば『ここを突破できるものならやつてみる』と言つ中国・朝鮮への挑戦状みたいなものであった。

後にこのHリアの奪い合いの為に敵味方多くの血が流れることになるのである・・・。

そして物語はここでの1年に渡る激戦に参加した多くの将兵達について語り継がれる大空の一つの伝説のことである・・・。

## 第三話～語り部～（前書き）

評価お願いします

## 第三話～語り部～

最初の話は極東戦争の終結から5年後の20××年の九州は北九州市から始まる。

戦時にはT S A D A作戦総司令部が置かれ4つの航空基地と一つの海軍港が置かれた前線司令部的な街であった。

戦争の終結から5年も経ち国の復興支援で戦争の生々しい爪痕は消えつつあった。

そして私はある人物に会つ為に閉鎖された旧作戦総司令部へと向かつた。

街の中心から一時間ほど車を走らせ、しばらく山の中を走るようやく目的地に到着した。

一見すると幽霊屋敷かと見間違えるほどの廃墟と化した施設だが、5年前まではここが日本防衛の要であり頭脳であったのだ。

ゲートの鍵は既に外されバイクが一台止まっていた、そのバイクの邪魔にならないように車を止めて私は中に入った。

そして施設の入り口であろう玄関のところに一人の男女が立っていた。

二人は私に気づくと帽子を脱いで深々とお辞儀してくれた。

「今日はお忙しい所を申し訳ありません、こんな所に呼び出してし

まつて「

ワンピースを着た女性がもう一度お辞儀しながら私に言った。

彼女の名前は宮本恵理元中尉、元T S A D A 防衛師団所属第七中隊ヴァルキリー隊2番機のパイロットであった女性だ。

「まあ、こんな所で立ち話も何ですから中へ入りましょう」

勲章を付けた軍服を着た中年の男性がドアの鍵を開けて中に入るよう促した。

彼の名前は佐伯隆一現中佐、元T S A D A 防衛師団所属第七中隊ヴァルキリー隊3番機のパイロットである。

「あ、はい・・・失礼します」

私は一人に促されて中に入った。中は荒れ果てており壁はひび割れガラスは全て割られていた。

数分ほど歩きある部屋の前に到着した、ドアには掠れかけた文字が書かれたプレートが貼つてあった。

「ここが司令室です、ここはさほど荒れてないから大丈夫でしょう

佐伯さんがポケットから鍵束を取り出しはうの鍵を開けた。

中は革張りのソファーとその奥に司令官が座つていただろうテスクが置かれていた。

本棚にはファイルが置いてあり、もしや機密書類かもと思い開いてみたがなんの事も無い普通の日誌であった。

「重要機密書類は殆どが中央司令部の保管庫にありますよ」

宮本さんが二コリと微笑んでソファーに腰掛けた。そして手提げバッグからお茶の入ったペットボトルを取り出した。

「そうですか・・・残念です」

私は苦笑いを浮かべて彼女に対面するようにソファーに深く座った。

「それで隊ちょ・・・いえ、大村浩介中佐の話を聞きたいと聞きましたが?」

佐伯さんがデスクに腰掛けて私をじっと見ながら聞いた。その目はまるで私の心を見透かしているようであった。

「ええ・・・兄と最後に飛んでいたのが貴方達と聞きました・・・兄の話を聞きたいのです」

私は胸ポケットから古い写真を取り出して一人に見せた。そこには私の高校の入学式を見に来てくれた兄・浩介が軍服姿で写っていた。

「失礼ですがお名前は?」

宮本さんが写真を見ながら聞いた。彼女の顔は軍人の疑りぐり深い顔では無くどこか姉のような表情をしていた。

「大村・・・有希です」

私は自分の名前をはつきりと述べた、それを聞いた二人は顔を合わせてうなずいた。

「間違いないな、よく隊長が言つてた名前だ・・・」

佐伯さんが懐かしそうに微笑んでつぶやいた。その顔はどこか遠い昔を見るような顔であった。

「大村隊長・・・いえ、お兄さんは非常に優れたパイロットでした」

富本さんが財布から一枚の写真を取り出して私に手渡した。そこには富本さん・佐伯さん、そしてもう一人の若者と兄が仲良く笑いながら肩を組んで写っていた。

「隊長は・・・本当の英雄だった、今の俺があるのも隊長のお陰だよ」

佐伯さんが外を見ながらボソリと呟いた。彼が吐いたタバコの煙が天井に昇りやがて薄れて消えていった。

「よかつたら・・・兄のことをもっと詳しく教えてくれませんか？」

私は思わず身を乗り出して一人に言った。二人は顔をもう一度見合させて肩を軽くあげて『仕方ないな』という顔をした。

佐伯隆一・富本恵理この二人の口から、今伝説が語られようとしていた・・・。

## 第四話～接敵・前編～

大村・宮本・佐伯の三人は南方方面軍（後のT S A D A 防衛主力軍）に配属されたばかりであった。

この時はまだ日中ともに宣戦布告はしてはいなかつたものの両国に衝突の兆しが見え始めていた頃だつた。

そしてこの時の三人は同じ訓練基地出身ながらも別々に配置されていた。

アーチャー隊3番機・宮本恵理（一等空曹）F - 15」（戦闘機）。  
クロウ隊2番機・大村浩介（三等空尉）F / A - 18（戦闘攻撃機）。

アルバトロス隊4番機・佐伯隆一（一等空曹）F - 2（支援戦闘機）。

このように分けられていた、そしてこの日三人は同じ空を飛んでいた。

三人の初めての任務は『T S A D A における哨戒任務』であつた、本来ならば1時間もあれば終わる任務であつた・・・。

眼下に広がる青い海、そして田の前に広がる雲ひとつない快晴の蒼い空。とても感動的な物であつた。

今日も何事もなく終わるのだろうな、と佐伯は全方位に田を向けな

がら思った。

相変わらず空には敵機どころかUFOも飛んでない、精々飛んでるのは海鳥程度だろう。

と無駄な事を考えていた時に突然緊急通信が入った。味方の通信からは『訓練か？こんな訓練あつたか？』となどの声が上がっていた。

『いちらAWACS（早期警戒管制機）！－アーチャー・クロウ・アルバトロスの三隊に告ぐ！－所屬不明の編隊がT S A D Aに接近！－幾度にも渡る呼びかけにも答えない、ただちに迎撃せよ！－繰り返す、ただちに迎撃せよ！－』

この言葉がすべての始まりであった、AWACSからの指示に従い彼らは直ちに接敵ポイントへと機首を向けた。

『いちらアルバトロス1、全機編隊を崩すな』

この任務の全体指揮官であるアルバトロス隊の隊長が全機に指示を出した。

もしかすると戦後初めての戦闘になるかもしれない、とその声は上ずつていた。

『アーチャー3、了解』<sup>ラジマー</sup>

宮本がまだ上手く感覚が掴めない上に始めての経験に震える手で操縦桿を握って返答した。

『アルバトロス4、了解』<sup>ラジマー</sup>

佐伯もこれから起つるであろう事に胸を躍らせながら返答した。

『クロウ2、<sup>ラジャー</sup>了解』

大村は他の全員と違つて冷静に返答した。怖くない訳は無いだがなぜか思考がクリアな状態である自分に驚いていた。

アーチャー・クロウ・アルバトロスの三隊、総勢12機の戦闘機が戦後初めての戦闘へと赴いた・・・。

10分ほど真っ直ぐ飛ぶと、AWACSからまた通信が入った。

『J-1からAWACS、所属不明機の詳細が分かつた・・・中国空軍MiG29（ファルクラム：戦闘機）にQ-5（強襲5：爆撃機）の編隊と判明。数は・・・対処できる数だらう、では健闘を祈る』

救いと言つた絶望と言つた、空軍に言わせれば『絶望的』であろう。

『対処できる数』と言つたのは自軍より少し多い「圧倒的多数」と言つジンクスがあった。

『アルバトロス1より全機に告ぐ・・・戦え、そして生き延びろ・・・以上だ。予備燃料タンク投下！』

アルバトロス1より最後の通信が入り、先頭を飛んでいたF-2が機体下部に装着していた予備燃料タンクを切り離して戦闘体制に入つた。

『了解、クロウ2投下』

大村が予備燃料タンク投下のスイッチを押し、全武装のロックを解除した。初めての戦闘なのに手馴れているのは普段の訓練のお陰であつた。

『了解、アルバトロス4投下』

佐伯が深呼吸をして予備燃料タンク投下スイッチを押してロックを解除しながら答えた。

『了解、アーチャー3投下』

宮本が震える手で予備燃料タンクを投下してため息を付いた、そして深く息を吸つてロックを解除した。

もう後戻りはできない、と三人は思いながら操縦桿を握り締めた。

そして・・・ついに接敵した・・・。

『クソ・・・これ程とはな・・・空が狭い・・・』

アルバトロス1が目の前に広がる光景を呟いた・・・。

## 第五話～接敵・後編～

目の前に広がる絶望的な光景。

いつも見える蒼い空が見えなくなつていった、見えるのは空を埋め尽くす敵機ばかりであつた。それを『空が狭い』、まったく見事な例えであつた。

『アルバトロス1より全機、交戦開始！－！』

アルバトロス1が機体をロールさせて敵の側面へと突っ込んでいった。

敵もこちらの存在に気付いたのか燃料タンクを投下してMiG29の編隊がこちらへと向かってきた。

『クロウ2、<sup>インゲイジ</sup>交戦！－！FOX3（AAM：中射程ミサイル 発射）！－！』

大村が素早く敵機をロックオンし中射程ミサイルを発射した。発射されたミサイルは白い尾を引いてまつすぐ目標へと飛翔していくた。

ミサイルはエンジンから出る赤外線を真つ直ぐ追尾して行き、そのままエンジンに突き刺さり大爆発を起こし空中で分解した。

『アーチャー3、<sup>インゲイジ</sup>交戦！－！敵機ガンの<sup>エミーガンレンジ</sup>射程内！－！発射！－！』

宮本が機体を急上昇させ、そのまま一気に操縦桿を奥に押し急降下を始めて敵爆撃機へと機関砲を叩き込んだ。

エンジンを撃ちぬかれた爆撃機は黒煙を吐きながらグラグラと揺れながら海面へと墜落していった。

『アルバトロス4、インゲイジ交戦！！アーチャー3とクロウ2を可能な限り援護する！！』

佐伯が敵機を翻弄するように飛び回る宮本機と大村機を視認できる距離を飛行しつつ一人に降りかかる火の粉を払った。

『敵に出来るパイロットがいるぞ！？こんな事は聞いてなかつたぞ！…』

混線する通信から敵の通信が聞こえてきた、敵は少数だったので護衛機の半分をぶつければ撃退できると踏んでいたのだ。

『落ち着け！！護衛機全機、敵機を迎撃し任務を続行しろ！！』

この敵の通信の直後に敵の反撃密度がどんどん増して行き味方の戦闘機も次々撃ち落されて行つた。

『畜生！！アーチャー1が落された！！アーチャー3、アーチャー隊の指揮を執れ！！』

AWACSが次々レーダーから消えていく味方機を見て毒づきながら叫んだ。

現時点ではアーチャー隊四機の内、アーチャー1・アーチャー2の2機が撃墜されていたのだ。

『「ひらアーチャー3、無理です！！アーチャー4が確認できません！！」この状況で指揮は取れません！！』

宮本がしつこく背後に喰らいつて敵機を振り切りつと機体を急加速させ左右に避けながら叫んだ。

『クロウ1と4が撃墜されました！！アルバトロスも飛んでるのは俺だけです！！』

佐伯が宮本の背後をしつこく飛び敵機に照準を合わせるつに飛んで叫んだ。もうミサイルの残弾数はゼロで先ほどから機関砲で撃墜していた。

『「ひらアーチャー3、たつた今クロウ3とアーチャー4が撃墜されました！！ただちに援軍を要請します！！』

戦況は地獄であった、全部で12機いたはずの味方機が次々に撃墜され残ったのは新米パイロット三人だけであったのだ。

『「ひらAWACS、緊急編制を行つ！！クロウ2・アルバトロス4・アーチャー3、君達しかいない！！今先ほど味方がスクランブル発進した！！彼らが到着するまでTSADAを防衛しろ！！以上だ！！』

AWACSが戦況が不利と睨んで後方に下がりながら指示を伝えた。

最寄の基地からどう考へても10分以上はかかる。そして燃料も弾薬も乏しい状況で生き延びなければならぬのだ。

『「ひらクロウ2、ラジャー了解・・・各機弾薬状況を報告せよ』

大村が火器管制システムをチェックしながら残り少ない味方機と連絡を取つた。

『アルバトロス4、ミサイル残弾数ゼロ・・・機関砲弾も100発以下だ』

佐伯が『EMPTY』と表示されている画面を歯を食いしばりながら報告した。

『アーチャー3、ミサイルは残り2発・・・機関砲弾も残りわずかです』

宮本が画面を食い入るように見つめて報告した。

大村機のミサイルは残り3発に機関砲は500発、ミサイルは計5発に機関砲は800発弱程度の戦力であった。

対して敵爆撃機部隊は護衛機の半分以上を失っているものの、なおも健在であった。

強襲型爆撃機は航続距離を伸ばす為に中・遠距離ミサイルを搭載していないが、万が一の為に短距離ミサイルを一発だけ搭載していた。

『クロウより各機に告ぐ・・・敵の中に突入して味方が到着するまで攪乱する』

もはやこれ以外に取る道はなかつた、自らの命を脅威に晒す代わりに敵を混乱させるしかなかつた・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3568c/>

The Last Wings ~最後の翼達~

2010年10月9日23時11分発行